

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目

異界と地上の交響
——『うつほ物語』における俊蔭一族について——

氏名 楊悦

論文内容の要旨

本論文は十世紀後半に成立した『うつほ物語』を「空間」（異界、異国、日本）、「累代」、「結婚」、「官職」等の観点から分析し、主人公俊蔭及びその子孫の繁栄を語る物語の方法を考察したものである。

『うつほ物語』は、異界にて自身が天女の子であるという運命を知った俊蔭が、そこで得た秘琴を子孫に伝授し、この秘琴によって子孫たちが貴族社会の中で成功していき、俊蔭の遺言である「幸ひ極めむ」ことを実現するという物語である。従来の研究では秘琴、漢学及び「孝」という三要素は別々に検討される傾向があり、それらの各要素の相互関係が『うつほ物語』のなかで如何なるつながりを持っているか、あるいはそのつながりが如何ように俊蔭一族を造形しているのかを明らかにした研究は見当たらない。また、俊蔭一族の超越性の具備以外に、その超越性が如何に物語内部の貴族社会で機能するかを考えなければならない。そこで、本論は『うつほ物語』の俊蔭一族の繁栄法をめぐる諸問題を、伝奇性・現実性を横軸、世代交代と身分上昇を縦軸にして考察した。この二つを軸として展開していくことにより、『うつほ物語』の俊蔭一族を繁栄させる方法として、彼らを天女の子孫として設定し、地上の人間に対する超越的な存在とすること、またその超越性を子孫孫に継承する俊蔭一族が、一代かぎりの成功ではなく、何世代にもわたって同じ超越的な美質を継承することで、物語における現世の貴族社会の頂点へ接近していくということについて考察した。本論は、主に俊蔭一族の超越性を表す諸要素の付与と世代伝承について検討した第一編（第一章、第二章、第三章）と、婚姻によって実現される昇格や、朝廷における官位の昇進という貴族社会におけるステータスの上昇の方法について考察した第二編（第四章、第五章）との二編に大別される。以下、各章の論旨を略述する。

第一編では、俊蔭一族が数世代をかけて、日本以外の空間（異界、異国）と関わる三要素（秘琴、漢学、「孝」）を持つ意義について論じた。第一章では、俊蔭一族が代々相伝する秘琴の神秘性・超越性の生成方法について分析検討した。従来の研究では『うつほ物語』における主人公一族に付与されている「琴」「書」という二要素は中国琴思想の琴書論・窮達論に由来していると指摘されているが、本論文では『うつほ物語』におけるこれらの二要素には中国文化における反体制の姿勢の

下での隠遁思想が根づいていないことを説明した。その原因は、平安時代の日本での琴の受容は、天皇家をはじめとする貴顕たちの間で親しまれるようになったことが始まりであったため、彼らは反骨の土壌を持つ層の人間ではなかった、あるいはそのような政治構造でなかったためであると示した。もともと中国の文化的文脈において、「左琴右書」という言葉に代表されるように、琴には地上の最高権力であってもそれを拒否できるイメージを有する楽器である。しかし、『うつほ物語』において、琴の拒否に纏わるイメージは俊蔭一族が秘琴を外部の人間に伝授することを回避するために転用されている。また、琴に含まれる隠逸精神は当時の日本の貴族が憧れる大陸の文化であり、異国の理想性を象徴するものであった。そのため、琴は漢学者の俊蔭にふさわしいと同時に、天皇家の興味を引くことのできる貴重で格式が高い宮廷の楽器として設定されている。ここで、俊蔭は異界の仙人から秘琴を獲得し、俊蔭女・仲忠はうつほという日本の山にある「異界」で秘琴の伝授を行ったが、このように描かれた俊蔭一族に対して、物語のもう一人の登場人物である源涼の持つ琴は唐土という異国由来の琴であるため、異国由来の琴には勝ることはできない。このような序列関係を示すことにより俊蔭一族内に保有される琴に神秘性・超越性を与えることができた。

この琴を得るために、異国異界に赴く前提として立てられる設定には、当時唯一異国へ行くルートであった遣唐使派遣が視野に入る。この遣唐使となるための条件である優れた漢才は俊蔭が外の世界へ行く前提となっており、日本にいる両親への「孝」は、俊蔭の日本帰還、また秘琴の技を守るための前提となっている。第二章では、俊蔭一族の漢学と「孝」について考察した。まず、秘琴獲得の前提は、漢才によって遣唐使になり日本以外の空間に行けることや、「孝」を理由にして波斯国王の要請を拒否して日本に戻れることという二点がある。また、俊蔭は「孝」を理由にして、嵯峨帝の授琴要請を拒否し、琴の神秘性を守ることができた。そして、中国の孝子故事を踏まえた仲忠孝養譚の奇瑞は仲忠と俊蔭女の生存を保証し、秘琴の伝承を維持した。つまり、物語において、漢学や「孝」などの「異国」的な要素は、異界的神秘性と超越性を喚起、連結、保護、維持する機能を持っていると考えられる。その一方で、漢学や「孝」は貴族社会のなかで地上の人間が持つ美質・美徳となった。苦学生で滑稽な人物として登場する藤英とは異なり、俊蔭・仲忠に表された漢学の天才さは当時の男性文人が憧れる美質である。仲忠の継母女三宮への「孝」も貴族社会の人間関係を円滑にし、地上の貴族社会で繁栄するための保証となり、理想的な男性貴族の風貌を印象づける。物語における現実の日本で「幸ひ」を得るという設定には、主人公たちに優れた人格が必要であるという作者の理想が投影されていると考えられる。

『うつほ物語』では、俊蔭一人にではなくその子孫にも秘琴、才能、美徳を付与した。そしてそれは世代間の伝承によって実現されたものである。この点はこの物語独自の発想である。第三章は、物語の作者が「琴の一族」の宝物に伝統、歴史という当時の貴族社会で重んじられる価値を付与していることに注目したものである。物語で描かれた俊蔭一族は、古代中国にみられる父系的「族」ではなく、古代日本独特の双系的社会における家族観に基づいて作られたものである。これは、「清原」、「藤原」といった異なる姓氏であっても血がつながっている子孫であれば代々秘琴、宝物を相伝できるという価値観が俊蔭一族の伝承のあり方から見て取れる。仲忠は「三代の手」として、累代の宝物や書物の継承者として描かれるが、学問の継承と官職の継承が緊密に関わっていた当時の儒学者の家業の継承に関わる「三代」とは異なるものであると判明した。すなわち、この「三代」の価値は家の伝統や累代の楽器に含まれる天皇家との深い絆である。それも源涼がいくら優れていようとも仲忠に勝ることができない理由となっている。

神秘性・超越性を持つ秘琴、内面的に優れた美徳・美質、及び当時の貴族社会で重んじられる「累

代」の価値をもっていたとしても、それだけでは、物語の成立期と推測されている十世紀後半の地上の貴族世界の中で「幸ひ」を勝ち取ることはできない。なぜなら、当時は藤原氏が娘たちを入内させ、生まれた皇子を天皇に推し自分が天皇の外戚として政権を握っていた時代であり、当時の読者が納得できる話としては、主人公たちが「幸ひ」を勝ち取る過程において、いくらかの現実的な要素の導入が必要であった。第二編では、結婚や官職の設定にみられる俊蔭一族の貴族社会での位置づけに着目し、この一族が持つ上記の伝奇的要素が如何に現実社会で機能するのかを検証した。第四章では秘琴一族の地位上昇の方法の一つとして、俊蔭女と仲忠の結婚を中心に考察した。まず、俊蔭女と藤原兼雅の結婚について考察した。俊蔭女へ深い愛情を寄せる貴公子でありながら、あて宮求婚者の一人でもある兼雅の「二重性」は従来人物造形上の「矛盾」として見られてきたが、本論文では俊蔭女の正妻の立場からみると、他の兼雅の妻に並び立つ者はおらず、物語の中で誰もが妻にしたいと考えるあて宮でさえも、せいぜい同等に扱われるに過ぎないという俊蔭女の優位性を指摘した。兼雅との結婚によって俊蔭女は上達部の貴族男性に大事に扱われ裕福な日々を暮らすこととなり、揺らぐことのない正妻の座を得た。また、生まれた息子仲忠も藤原氏の出自を得ることとなり、清原家から藤原家へという「家」の格の向上が叶った。さらに仲忠が秘琴を弾いた結果、その超越的な価値が貴族社会に認められ、帝は女一宮を仲忠に降嫁した。生まれた娘いぬ宮は秘琴の四代目の継承者であると同時に、藤原氏、天皇家及び源正頼家の血統を受け継ぐ人物である。すなわち、俊蔭女と兼雅との結婚は「家」の問題を解決し、仲忠と女一宮との結婚は「血」の問題を解決した。この一連の結婚の設定により、秘琴四代目で、藤原氏の身分や高貴な血統を持ついぬ宮は完璧な「后がね」となった。いぬ宮が父祖から受け継いだ秘琴によって貴族社会の人々を魅了する、という描き方から、物語に描かれたもう一つの家族である正頼家と異なった繁栄のあり方、「后がね」のあり方を描こうとする作者の意図が窺える。作者は俊蔭一族の秘琴伝承を描き、四代目のいぬ宮を通して、理想的な「后がね」物語を示そうとしたのではないかと推察される。

理想的な「后がね」の出自だけではなく、作者は意図的にいぬ宮の親族に朝廷における公の地位を付け加えようとしている。藤原氏の高官（兼雅）の孫娘という出自は大切であるが、作者が思っている「幸ひ極めむ」段階にまでは到達していない。それに加えて、後宮で発言権を持つ祖母や朝廷で位人臣を極めた父親がいれば、いぬ宮の将来の入内の道はより強固なものとなる。第五章ではさらに、俊蔭女の尚侍就任や仲忠の昇進の意味について考察をした。権力者の正妻でありながら尚侍に就任するという人事は奈良時代にはよくみられるが、俊蔭女のような帝の好感による就任という構想は、物語成立当時の背景をも踏まえたものと考えられる。子孫からは中宮や天皇を輩出することも可能というほどの印象を持つ尚侍職を得ることのできた大きな要因は、ほかでもなく俊蔭女の秘琴の才能である。この設定からも、「幸ひ」は天皇、上達部などの男性側からの評価によってだけでなく、自身の優れた才能によって実現されるべきだという作者の価値観が窺える。一方、秘琴披露によって女一宮との結婚を実現した仲忠は物語の後半において飛躍的な昇進を遂げた。この飛躍的な昇進の背後には、女一宮の父帝や祖父正頼からの支持があった。帝や正頼の支持を得られたのも、仲忠自身の持つ治世者としての美質、漢才や孝の美德と無関係ではない。祖父の家集を帝の前で進講した後で、仲忠は継母女三宮と父兼雅の関係修復に尽力し、異母妹梨壺の世話などにも尽力した。この時期の仲忠は、うつほ住みの頃の、母親を養う幼い孝子のおもかげが残りながらも、すでに貴族社会の中で周囲の人間関係を円滑に構築できる円満な政治家の風貌を備えた人物として描かれている。第一章、第二章でも述べたように、秘琴は仲忠が王権へ接近する上で大きく機能しているが、彼はそれに加えて漢才や孝の美德を持つ人物、理想的な后がねいぬ宮の父親、将来の治

世者として造形されている。このように、いぬ宮の後見としての群像ができあがった。祖父は大臣であり、母は宮である。そのほかにも、琴を伝授する祖母は尚侍であり、父親は将来の権力者である。作者は当時流行っていた后がね育成物語を構想するに当たり、単なる権力争いで国の頂点に立つのではなく、いくつかの才能や道徳などの内面的な美質を持った上で最終的に権力を握るとというのが理想的な為政者の姿なのだという期待を物語に寄せた。

以上五章を通じて、『うつほ物語』に描かれた俊蔭一族の秘琴獲得、秘琴伝承と身分の上昇によって「幸ひ極めむ」ことを実現するための物語の方法について検討した。この物語において、「異界」や「異国」、さらに「累代」が物語を展開していくための方法として用いられている。まず、「異界」は想像の空間であり、このような空間に入って秘琴を獲得した上で日本へ帰国した俊蔭は神秘的、超越的な人物として塑像されている。しかも物語はこのような神秘性、超越性を俊蔭の子孫にも与えた。次に「異国」であるが、当時の日本人は遣唐使以外では、異国に行く可能性のある立場の者は限りなく少ない。「異国」もこの意味で「異界」と同様に、伝聞や想像の空間である。俊蔭は本来の目的地である唐には行っていないが、唐に関わる文化的要素である漢学の才能や「孝」の美德を持っている。しかも、このような才能や美德は秘琴と同様に子孫に継承される性質のものである。異国的な才能や美德は物語において、異界の秘琴を獲得する前提となり、また秘琴を一族内部に保護し、維持するという機能を果たした。すでに述べたように、俊蔭が琴師となって、秘琴を東宮に教えることを拒否する際に用いたのは、親孝行の論理であり、俊蔭の辞官の発想も、中国の隠逸文人の「左琴右書」の論理から由来したものであった。このようにして秘琴は直ちに天皇家に明け渡すことなく、平安時代の貴族社会に広く認められる「累代」の価値を生み出した。この「累代」の価値を構想した作者は、当時流行していた「后がね」物語を作ろうとしたのではないか。俊蔭一族の四代に渡る結婚を語るのは無論物語の長編化の要請によるものであるが、これは俊蔭の曾孫いぬ宮に后がねとして完璧な出自と血統を持たせるためになされたといっても過言ではあるまい。また、一族の官職昇進もいぬ宮に有力な「後見」を配置するためであった。ただし、作者は結婚・官職という方法を利用してはいるが、それだけではない。俊蔭女も仲忠も自身の優れた才能を以って貴族社会に認められ、賞賛された、という設定から、人間の優れた美質や才能で「幸ひ」を得るという作者の価値観を読み取れる。